

JACCヒマラヤ環境調査隊の活動 JACCの新しいジャンルを拓くべく 躍動した多彩な人材

山川陽一、箕岡三穂

温暖化の影響で氷河湖の拡大が加速している。慶応大学の福井研究室では、エヴェレスト山麓のイムジャ氷河湖に、常時、監視できる環境を整えた。同研究所が再訪する時期に合わせ、日本山岳会は環境調査隊を組織、各種調査を行なった。その結果を報告してもらおう。

今回の日本山岳会によるヒマラヤ環境調査の企画は、次のふたつの大きなテーマを持っていた。

- ①慶応大学の福井プロジェクトに協力して、イムジャ氷河湖下流域の環境調査を実施する。
- ②エヴェレスト街道の山歩きを楽

しみながらカラパタール登頂をめざす。

前者だけならば、いわゆる学術調査隊ということになるだろうし、後者だけならば、どこのツアー会社でもやっているヒマラヤのトレッキングツアーと変わるところは

ない。ふたつのテーマを同時に掲げたことが、この企画を新鮮で魅力あるものに仕立て上げ、多くの方たちから支持を受け、多くの会員の参加を得た最大要因であった。舞台がエヴェレスト街道という

ゴールデンコースだったことや、調査テーマが「地球温暖化に伴って引き起こされるGLOF（氷河湖の決壊洪水）の影響度調査」という時宜を得たものであったことも働いて、たちまち募集人員を超える参加申し込みがあり、第二隊を追加編成することになった。

ここに、隊員たちの活躍の一端を紹介したいと思う。

人口調査グループの活動

(リーダー＝富澤克禮)

温暖化問題を取り上げたテレビ



イムジャ氷河湖で合流した一隊、二隊の全メンバー

朝日開局50周年特別番組(2008年3月放映)のなかで、イムジャ氷河湖が決壊したとき影響を受ける下流域の人口が1万人と紹介されていたが、それがいったい季節的にいつのデータなのか、ひと

口に下流といってもどこからどこまでを指しているのか、住民だけなのかトレッカーも含めた数字なのか、出所はどこかなど、根拠不明なものであった。

われわれは、ルクラからチュクンまでの9集落について、戸数、人口(男女)、年齢階層、人口の盛衰の4項目について実地の聞き取り調査を行なった。その結果、戸数518戸、人口2440人(男1036人、女1404人)という結果を得た。男性が少ないのは労働人口が地域外に流出する影響であろうか。この2440人に、トレッカー(年間2万人)やシエルパおよびポーターを加えた数が実際の影響人口になる。

今回調査対象外だったルクラより下流域の人口がどうか、地域有力者からの聞き取りという方法がどれほどの正確性を持っているかなどいろいろの問題はあるが、われわれの調査は、そもそも人口統計や住民登録などと無縁の世界で行なわれた初めての实地調査であったことは、特筆に値すると思う。

住民の意識調査グループの活動 (リーダー＝平野裕也)



タンボチェで聞き取り調査をする人口調査グループ

あらかじめ用意した14項目の設問について、ルクラからチュクンに至る9の集落の住民50人に対して個別インタビューを行なった。被面談者は、極力各集落に長く居住する住民を選び、インタビューは2人一組で、ネパール語、シエルパ語が話せ、日本語も理解できるシエルパのリーダーを通訳として行なわれた。

設問は、氷河湖の存在や決壊洪水発生の可能性などにかかわるもの(第1グループ)、降雪、気温、雨量、川の水量など気象状況の変化にかかわるもの(第2グループ)、野生動物や植物の状況など生態系の変化にかかわるもの(第3グループ)など合計14項目である。

詳しくは報告書をご覧ください

ことにして、第1グループでは、かなりの人(36名)が上流の氷河湖の存在を知っており、そのうち

18名が将来、決壊洪水が起ると答えている。起ると答えた人の何人かは「人為の結果が神の怒りをおこして起ると考え、また「お祈りしたので起らない」と考えている人たちもいたことは、少数意見とはいえ無視できないものがある。「ネパール・ヒマラヤの山岳地帯で、村落共同体の維持に果たしてきた宗教の歴史的役割は軽くはない」(古市進)ということか。

第2グループで注目すべきことは、人それぞれ表現は違うが、ほぼ全員が山の雪が昔と比べて少なくなった、居住地の雪も少なくなったと答えたことである。ここヒマラヤでも温暖化の影響は確実に現われていることを証明している。

第3グループでは、答えが割れ、野生動物が増えた3割、減った5割、植物も減ったと答えた人が6割いる反面、増えたと答えた人もかなりの数に達した。これは、観光客や人口増に伴う森林の伐採や乱獲が大きな影響を与えてきた反面、サガルマータ国立公園の指定によって伐採や狩猟禁止の規制が

強化され、植林も始まっていることによるものであろう。

測地グループの活動

(リーダー＝西田進)

この領域は、当初われわれには手に余るのでやめようと考えたのであるが、西田会員が強い熱意を示してリーダーをかって出た。出発前にグループで福井教授を訪ねてリクエストを聞き、さらに使用測量機器(レーザー距離計、コンパスグラス、GPS、デジタルメ)を使つてのリハールを行なうなど非常に意欲的であった。実際に調査は、決壊洪水が起きたとき影響を受ける可能性のある民家、ロッジ、橋、発電所、畑など22カ所についての川面からの比高調査、2カ所の橋付近の川の断面形状計測である。

この調査の延長線上に決壊洪水に対するハザードマップの作成があるが、それにはさらに本格的な調査活動が必要であり、今回の調査は「ハザードマップ作成に資するデータを取得することのフィージビリティを確認すること」(西田)に留まった。特筆すべきは、山岳地帯において容易に使用でき



14項目の設問をした意識調査グループ

る安価でハンディな計測機器類で
相当な事ができると実証したこと
である。

「ハザードマップ作成に向けた今
後の課題としては、民家の河川水
位との位置関係計測の手法を人口
調査の精密化と連携させることが
われわれのチーム内で可能な発展
形態のひとつであろう」(古市進)

ゴミ処理・トイレ問題・通信 インフラ・ポーター擁護

(第二隊リーダー 古野 淳)

第二隊は、福井プロジェクトの
支援テーマとは別に、独自テーマ
を掲げて調査にあたった。ここで
調査内容の全部を紹介することは
できないが、ゴミ処理問題の一端
に触れておこう。

ナムチェのNGOサガルマー
タ・ゴミ管理団体「SPCC」は、
1991年からクーンブエリアの
ゴミ管理に取り組んできた。SP
CCの組織は、人材、資金、活動
すべてが自己完結しており、国内
外の直面する山岳地ゴミ問題を解
決する方法論として参考になるこ
とが多い。

年間(2006年度)の予算規
模は670万ルピー(1140万
円)で、その収入の7割がエヴェ
レスト・アイスフォールの通行料
である。クーンブエリアに35カ所
52個のゴミ箱を設置し、26人のス
タッフが管理にあたっている。1
990年発足した日本のHAT
Jがこの地方のゴミ問題に果たし
た貢献も大きいものがある。ルク
ラにあるゴミ焼却炉はHATJ
が寄贈したものである。SPCC
の活動によって街道沿いのゴミは
年々減っているが、故エドモンド・
ヒラリー卿、田部井淳子さんらの
啓蒙活動が果たした役割も忘れて
はならない。

**JACは多士落々、捨てたも
のではない!**

下山直後、われわれは、カトマ



ハンディな計測器で測量する測地グループ

ンズのホテルで、今回の企画につ
いて隊員からホットな感想を聞い
た。個々の意見は非常に興味深い
ものがあるが、ここでは残念なが
ら紙面の都合で割愛せざるを得な
い。みんなの意見を集約すると「今
回のプランへの参加を決めるにあ
たり、強い山への憧れに加えて、
地球温暖化に対する危機感や山の
環境問題に対する関心が後押しを
したこと、集まったメンバーは多
士落々だったこと、住民のための
調査活動でありシステムである以
上、民意を理解し重視した調査と
システム構築が福井プロジェクト
に望まれること、JACとしてな
らんかの形で今後も今回のような
活動を継続的に行なうことが望ま

しいと考えていること」などであ
った。

宮下会長も報告書の巻頭言で、
「山登りだけでなく、社会、文化、
学術など各方面に豊かな経験と知
識を持った人材が数多くいること
は、日本山岳会の大きな財産であ
る。そんな会員たちが楽しみなが
ら社会貢献できる今回のような活
動は、今後の日本山岳会のひとつ
の活動領域を示しているのかもしれ
ない」と述べている。

近年、われわれ日本山岳会では、
高齢化の負の側面だけがクローズ
アップされてきたくらいがあるが、
今回の活動を終えて「JACも捨て
たものではないぞ!」という実
感があつた。

＊ 『日本山岳会ヒマラヤ環境調査隊 報告書』

2008年日本山岳会ヒマラヤ
環境調査隊の報告書が完成しまし
た。82ページのうちエヴェレストをは
じめとするカラー写真が8ページあり
ます。予冊が若干あります。興味
のある方には一部1000円にて
頒布いたします。

申し込みは箕岡三穂 (FAX) 042
17761178) まで。